

December 2011 Vol.35

OPALLOZ

ウーラノス



オリエンテーションリーダーとして活躍

おがわ えりな
文学部4年 小川 恵里奈さん

新入生の世話役ともいふべきオリエンテーションリーダーを3年間務めました。入学したばかりの頃、新入生の面倒を一生懸命見てくれた先輩たちの姿に憧れ、「今度は自分の番だ」と思って始めました。毎年多くの新入生と出会えたことはもちろん、学部や学科の垣根を越えて、リーダー同士の絆を深めることができたことは、私にとって生涯の財産になりました。

本当にいろいろな人たちがいて、縦・横の関係を広げられるのは、東北学院大学の魅力だと思います。卒業後は航空業界への就職が決まっているので、自分の夢の翼をさらに大きく広げていきたいですね。

 東北学院大学
TOHOKU GAKUIN UNIVERSITY

会輝く



地域に根ざす「地の塩」として、 東北学院大学らしい貢献を



学長 星宮 望
Nozomu HOSHIMIYA

■聖書の言葉を糧にしなが

東北学院大学らしく、ひとりひとりの学生や地域との関わりを大切にしながら、きめ細かくフォローしようという本学のスピリットは、震災後の対応の中でも活かされています。被災地における被害の状況には心を痛めているとしか言いようがありませんが、被害を受けた地域の皆様に対して可能な限りの支援を続けることが、地域に貢献する大学としての務めだと考えています。

本学を含めた東北学院の同窓会には、全国を結ぶ85の同窓会支部と、企業などに設置された115のTG会がありますが、各支部の支部長と連携を図りながら、被災地の子どもたちに文房具を寄贈しました。また、医師や歯科医で組織されているドクターTG会とデンタルTG会、法律の専門家で組織されている弁護士TG会と司法書士TG会に協力を求める形で、仮設住宅にお住まいの方を対象とした無料相談会を実施。さらに同窓会員の中にも被災された方が多くおられるので、学校法人東北学院と東北学院同窓会が力を合わせ、各支部へのお見舞いも行っています。

大きな被害を受けた学生に対しては、経済的な事由で学問の道が閉ざされることがないように、さまざまな形で学納金の減免措置を講じています。また、これから本学で学びたいという入学希望者に対する支援制度も充実させています。

歴史的な大震災に見舞われた中、地に足をつけた貢献が果たせたのは、本学があらゆる活動の機軸にしている聖書の言葉を実践できたことに尽きると思います。一例をあげると、震災直後の多賀城キャンパスでは、津波でずぶ濡れになりながら避難してきた数百人の市民のために施設の一部(礼拝堂)を開放し、緊急用として蓄えていた水や食料、毛布などを提供しました。多賀城にある工学部は、平成24年に創設50周年を迎えますが、まさに地域に寄り添う「地の塩」としての役目が果たせたと思っています。

■リベラルアーツ教育を柱に

今回の『ウーラノス』の中でも紹介していますが、本学の災害ボランティアステーションは、社会に対し、今もさまざまな形で復興支援を続けています。本学の想いに共鳴し、全国から多くの大学が連携してくれたことは喜びであり、大きな成果の一つと言えるでしょう。被災地に対する支援はもちろん、かけがえのない“生きた学びの場”として、それぞれの人生の経験につなげて欲しいと思います。

他の人のために尽くすという点でいうと、本学には全国の大学の中で唯一「セツルメント会」があります。昭和30～40年代には全国の大学に存在していましたが、今では本学だけになってしまいました。学生が主体となって地に足をつけた貢献を続けていることは、本当に胸を張っていいと思います。

今こそ私たちは「これから先どう生きるべきか」について考える必要があります。リベラルアーツ教育に主眼を置いた本学では、人間としてバランスのとれた基礎を広く深く養うことに重点を置いています。毎日の礼拝は、聖書の言葉に耳を傾け、自分と向き合いながら、どういう生き方をすればいいのか、じっくりと考える機会になります。こうした時間の積み重ねこそが、ひとりひとりの人間性に磨きをかけ、これからの社会にふさわしい人材の育成につながっていくのです。今回の大震災を経験して「他者へのいたわりと感謝」の大切さを誰しもが感じたのではないのでしょうか。

本学は「若者の心を育てる」ことにかけて、日本で一番力を入れている大学だと思っています。これから地域が復興し、以前にも増して活力に満ちた社会の実現に向けて、地域に貢献できる人材を提供していくこと、それこそが地域に根ざす本学の使命だと考えています。

東北学院大学災害ボランティアステーションは、 学生ひとりひとりの“生きた学びの場”

■大学間連携「夏ボラ」気仙沼プロジェクト



1,200名近くの学生が登録をしている本学の災害ボランティアステーション。7月16日から9月22日にかけては、大学間連携による「夏ボラ」気仙沼プロジェクトが行われました。一週間を1クールとし、全10週にわたって続けられた活動には、青山学院大学や関西学院大学、名古屋学院大学、明治学院大学など、大学間連携災害ボランティアネットワークに加盟している14大学から希望者が参加しました。ボランティアの学生・教職員は、気仙沼(唐桑地区)の体育館に宿泊しながら、がれきにまみれている木や鉄、ガラス、プラスチックなどの分別作業や、津波で流された写真の洗浄作業、リアスアーク美術館から依頼された民俗資料のレスキューなど、さまざまな形で支援を行ってきました。



このプロジェクトには延べ320名の学生と教職員が参加。「夏ボラ」が始まったばかりの頃は、戸惑いがちの学生の姿も見られましたが、やがて回を重ねるうちに、自分たちから率先して動くようになりました。学生の間からは「チームワークの大切さを学んだ」「情報収集力や交渉力が身に付いた」などといった声が聞かれ、「夏ボラ」は復興の力になれただけでなく、教室では得られない“生きた学びの場”としても大きな成果をあげることができました。12月16～17日の2日間は、「夏ボラ」の集大成として東日本大震災と大学生ボランティアの役割をテーマにしたシンポジウムを開催いたしました。



は得られない“生きた学びの場”としても大きな成果をあげることができました。12月16～17日の2日間は、「夏ボラ」の集大成として東日本大震災と大学生ボランティアの役割をテーマにしたシンポジウムを開催いたしました。

■本学の特徴を活かした「知の支援」



被災地の子どもたちを対象にした学習支援ボランティアや、震災の報道写真集の英訳、被災地の子どもたちに宛てた海外からのメッセージの和訳など、本学の特徴を活かした「知の支援」も活発に行われています。本学の英文学科の教員と学生が中心になって英訳を担当した報道写真集『THE GREAT EAST JAPAN EARTHQUAKE AND TSUNAMI』は海外からの関心が高く、アメリカで開催された写真展でも注目を集めました。

ハードの支援からソフトの支援へ。今後は被災地の状況に合わせて、求められるボランティアの形も変わっていきます。学生の中でリーダーが育ち、次の学年へとそのスキルが継承されることで、本学の災害ボランティアステーションもさらなる進化を遂げていくことでしょう。

災害ボランティアステーションの活動に関わっていただいている関係者の皆様には、心からの御礼を申し上げます。

◎災害ボランティアステーションの活動は、ホームページでもご覧になれます。

【東北学院大学災害ボランティアステーション】

HP : <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/volunteer/>

ブログ : <http://flat.kahoku.co.jp/u/volunteer17/>

ツイッター : http://twitter.com/intent/user?screen_name=tgvolu



ヨット部員が大手柄

震災当日、名取市の閉上湾内で他大学と合同練習を行っていた本学のヨット部員2名が津波の襲来を察知し、冷静かつ確かな判断でヨット部関係者を避難誘導させて尊い人命を守った功績により、大学から学長特別表彰を授与されました。二人とも岩手県沿岸部の出身で、幼少の頃から培ってきた防災知識が大事な場面で活かされました。

キャンパス点描



土樋キャンパス



土樋キャンパス



多賀城キャンパス



多賀城キャンパス



多賀城キャンパス



泉キャンパス



泉キャンパス



多賀城キャンパス



土樋キャンパス



泉キャンパス



泉キャンパス



泉キャンパス



泉キャンパス



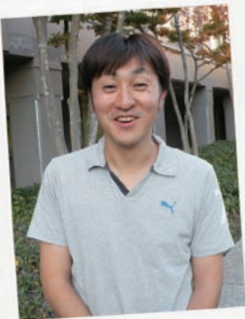
土樋キャンパス

震災という苦難を乗り越えて、すっかり元気を取り戻した土樋・多賀城・泉の各キャンパス。本学の“今”があるのは、地域に支えられてきたおかげです。そして16万人を超える東北学院の同窓生が、地域で信頼という名の大きな輪を咲かせ、いつもあたたかく見守ってくれているおかげです。若者の心を育てること、それが東北学院大学の変わらぬ想いです。本学は聖書の言葉を一つの座標軸にしながら、社会における「地の塩」として活躍できる人材の育成をめざし、今後も歩みを続けていきます。



先生ってこんな人

元気復興



すずき ひろゆき
鈴木 宏哉先生

教養学部

「元気復興」を合言葉に、女川町の子どもたちを元気にするための活動を行っています。小学4年生から中学3年生までを対象に、町内の子どもたちの運動量について調べたり、放課後の運動イベントを企画したりしながら、町の教育委員会を下支えする形で、子どもたちの運動量を増やすお手伝いをしています。

「おながわっ子元気アッププロジェクト」と名付けたこの活動には、体育・スポーツ、医学、学校保健など、さまざまな分野の専門家が参加し、支援の輪はさらに大きな広がりを見せています。ゼミの学生にとっては、“生きた学びの場”にもなっています。

大切なのは、より継続性のある取り組み。地域の皆さんに対して、運動やスポーツの価値を発信しながら、これからもずっと女川町の復興を見守り続けていきたいと思えます。

(担当科目／体育講義)



手作りで発行している「おながわっ子元気アッププロジェクト通信」。

ギターでリラックス



ロング,
クリストファー先生

文学部

小学生の頃、自分のおじがギターを弾いているのを見て「かっこいい」と思い、ギターを教わるようになりました。そのおじというのが天才肌の音楽学者で、14歳のときには本格的に弟子入りを果たしました。その後はトランペットやフルートなども覚え、学生時代は楽団の一員として賞をもらったこともあります。

今はクラシック系のギターをこよなく愛し、もっぱら自分のために弾いています。ギターの美しい音色に包まれていると、心からリラックスでき、ストレスの解消につながります。楽譜を完璧にマスターするというよりも、好きなメロディーだけをランダムにつま弾くのが好きですね。レパートリーが増えたら、いつの日かお気に入りのアイリッシュパブなどで、お店の雰囲気の一部として演奏してみたいです。

(担当科目／コミュニケーション論)



音だけでなく、木の香りも魅力的な愛用のギター。

蝶に魅せられて



たけばやし よしひさ
竹林 芳久先生

工学部

小学生の頃から昆虫に夢中でした。なかでも蝶が大好きで、高校生になるまでその姿を追い求めていました。その後、しばらく中断していましたが、50歳を過ぎた頃、たまたま出張で沖縄へ行ったとき、日本最大級のオオゴマダラチョウが優雅に舞っている光景を見て、情熱が再燃しました。

それ以来、蝶の楽園として有名な石垣島に年4回は通っています。マダラチョウが集団で越冬している様子を目の当たりにしたときは、さすがに感激しました。素晴らしい自然の中で癒されながら、童心に返ることができるのは大きな魅力だと思っています。

長年にわたって蝶を観察していると、地球温暖化の影響を感じずにはいられません。人間と蝶が共存できるような環境を守り抜くこと、それこそが現代に生きる私たちの務めだと思っています。

(担当科目／建築設備)



石垣島で発見した越冬中のマダラチョウの集団。

学生と企業のミスマッチ解消と、 キャリア教育の充実に力を注いでいます。

大学新卒者の就職は依然として厳しい状況が続いていますが、本学の就職部では土樋・多賀城・泉の各キャンパスに就職課(係)と資料室を設置し、就職活動の拠点として学生ひとりひとりの可能性を力強くサポートしています。本学における就職支援の“今”を紹介します。



就職部長／前田 修也

現在、就職部が特に力を注いでいるのが、学生と企業の間におけるミスマッチの解消と、早い段階からのキャリア教育の充実にあります。

一つ目のミスマッチは、せっかく就職しても「仕事が自分に合わない」というものです。よく卒業後の離職率は「七五三」(卒業後、3年以内に離職する割合は中卒で7割、高卒で5割、大卒で3割)と言われますが、一般的に大卒者の約3割が3年以内に辞めてしまう(厚生労働省調べ)という現状を考えると、いかに深刻な問題であるかがおわかりいただけるはずです。職業観が確立されていなかったり、自己分析が不十分だったり、原因としてはさまざまなことが考えられますが、イメージ先行で企業を選んでしまうことは大きな要因の一つでしょう。新規学卒者の有効求人倍率を企業規模別に見て

みると、従業員5千人以上の企業が0.47倍なのに対し、従業員300人未満の企業は4.41倍(いずれもリクルートワークス研究所調べ)。つまり大企業というイメージにとらわれなければ、より多くの企業の中から自分に合う仕事を見つけることが可能なのです。就職部としては、大企業だけでなく、地元にある優良中小企業と学生のパイプ役もどんどん務めていきたいと考えています。また、業種間のミスマッチについても解消していきたいと思っています。

二つ目のキャリア教育については、これまで以上に重点を置いていく必要があると考えています。本学の一部の学科では、以前からキャリア教育をカリキュラムの中に正課として組み込んでいますが、今後は大学全体として取り組んでいくように準備を進めています。

就職活動の早期化・長期化に伴って、最近さまざまな悩みを抱える学生が多くなってきました。本学では専門のキャリアカウンセラーを配置し、学生ひとりひとりの悩みに応えるようにしています。また、内定が決まった4年生が3年生に対して、自分自身の体験をもとに、就職活動のポイントなどを直接アドバイスする機会も設けています。

各キャンパスにある就職課は、企業に関する最新情報を発信するだけでなく、学生の皆さんが進路について気軽に相談できる窓口です。ぜひ積極的に活用してください。



キャリア教育のさらなる充実に向けて

大学での4年間というのは、自分の生き方を考えるうえで、もっとも大きな影響を持つ時期です。1年生のうちから「聞く力」や「伝える力」などの学びの技術を身に付け、人間力を高めるための土台を築くことが大切です。

キャリア教育の目的は、職業(仕事)を通して生きる術を身に付けることにあります。エントリーシートの書き方や面接の心得などの就職活動のテクニックを学ぶためだけのものではありません。自分が生きていくうえで、どんな仕事にやり甲斐を持ち、いかに自分らしく生活していけばいいのかを自らに問いかける、まさに自分の人生そのものをデザインする絶好の機会と言えるでしょう。このキャリア教育と就職支援との緊密な連携を通じて、社会との接続がよりスムーズにできると考えています。

キャリア教育は早い段階から始め、まずは全学共通で人間基礎力と社会人基礎力を養い、学年が進んだところで各学科の特性を反映させることが必要です。大切なのは、学生ひとりひとりが自分の目標を持ち、その目標に向かって大学で学ぶことです。もちろん「やらされ感」で学ぶのではなく、自ら主体的に学ぶ姿勢が重要です。



工学部の就職支援

工学部の就職支援メニューには、全学共通の就職支援メニューを基本としながらも、工学部らしさを活かした独自のフォロー体制がいくつかあります。

その代表格としては、各学科の教員で組織された「就職委員会」があります。各学科から2名ずつ教員が配置されているので、より身近なところでの指導や助言が可能で、学生は4年生になると、それぞれの研究室に配属され、担当教員とは毎日のように顔を合わせるため、万全なサポート体制のもと、安心して卒業研究に専念することができます。

また、学校推薦という形で就職活動をする学生が多いことも工学部の特徴ですが、最近はインターネットによる応募が主流となり、自由応募で自主的に就職活動をし、内定をもらう学生がかなり多くなってきています。



—保護者の皆さんへ—

就職活動中のお子さんを抱える保護者の皆さんにとって何より大切なのは、お子さんの話をじっくりと聞いてあげることです。保護者の皆さんが就職活動をしていた頃と比べて、今は就職活動の時期も内容もまるで違います。就職活動を始める時期はぐんと早くなり、エントリーシートの提出やSPI試験(多くの企業で実施している採用試験)など、乗り越えなければならないハードルも多くなっています。

そのような厳しい状況の中でも、お子さんが自信を持って就職活動に取り組めるよう、保護者の皆さんは、良き先輩としてあたたかく見守りながらアドバイスしてください。

キャンパスで聞きました!

今回のテーマ 2012年に賭ける思い

一つのテーマに対して、みんなはどう思っているのか、キャンパス内の声を集めたこのコーナー。今回は「2012年に賭ける思い」をテーマに聞いてみました。



就職活動を頑張りながら、学生時代にしかできないことにチャレンジしていきたいです。

3年生・亀谷さん



もうすぐ社会人。地域の復興について考えながら、自分自身、成長していきたいです。

3年生・斎藤さん

卒業後は銀行マンをめざしています。就職を早めに決めて、親を安心させたいですね。

3年生・小山さん



サークルと勉強と恋愛。この3つを頑張っ
て、より充実した学生生活にしたいです。

1年生・鈴木さん

勉強とサークルのほかに、もっと新しいことにもトライしてみたいですね。

1年生・菊池さん



球技を楽しむ SEASON というサークルに所属。野球と勉強に燃えます。

1年生・菅原さん

2011年は震災の影響もあって大変でしたが、一日一日を大切に、より充実した年にしたいですね。

1年生・横山さん

卒業後は社会の復興の役に立てるように、今のうちから幅広く資格を取得したいです。

1年生・我妻さん



工学部での勉強はもちろん、アルバイトも頑張っ
て、毎日をもっと充実させたいです。

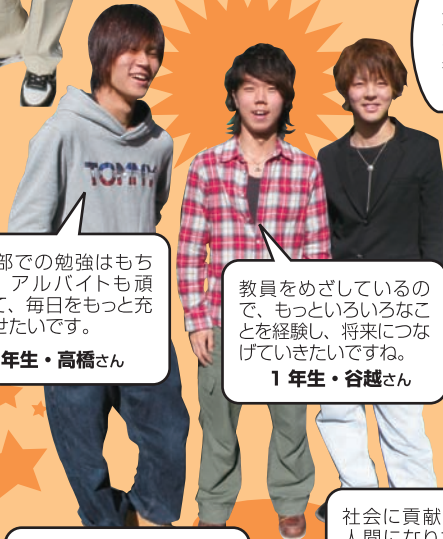
1年生・高橋さん

教員をめざしているの
で、もっといろいろなことを経験し、将来につな
げていきたいですね。

1年生・谷越さん

2012年の目標は「文武両道」。勉強にもスポーツにも燃えて、心身ともに鍛えます。

1年生・湯山さん



社会に貢献できる人間になりたいです。できればボランティアもやってみ
たいと思っています。

3年生・伊藤さん



自分なりにベストを尽くして、工学部での勉強と就職活動を両立させたいです。

2年生・大竹さん

今年は就職活動が始まるので、学科での学びが活かせるような仕事に就けるように頑張ります。

2年生・長内さん

石巻の石ノ森萬画館でアルバイトをしていました。地域が一日も早く復興することを願っています。

3年生・相澤さん



自分のやりたいことをやり尽くし、さらに充実した学生生活にしていきたい
と思います。

3年生・高子さん

震災からの復興は大きな願い。就職活動はもちろん、残りの学生生活をもっと楽しみたいです。

3年生・山本さん

皆様のご意見をお待ちしております。

編集室では「2012年に賭ける思い」というキーワードにちなみ、読者の皆様からのご意見やご感想を募集中です。ご応募は、住所・氏名・連絡先をご記入のうえ、下記のメールアドレスあてにお送りください。

E-mail : uranos@staff.tohoku-gakuin.ac.jp

全国の強豪を相手に インカレで活躍

自転車競技部

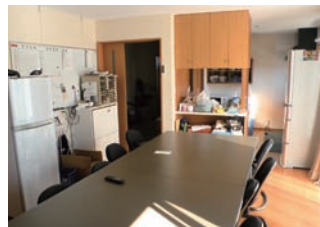
9月1日(木)～4日(日)の4日間、長野県松本市のかりがね自転車競技場(333.3メートル)と同県大町市の公道周回コース(1周12.6キロメートル)を会場に、自転車競技部のインカレ「文部科学大臣杯 第67回全日本大学対抗選手権自転車競技大会」(日本学生自転車競技連盟主催)が開催されました。インカレでは、これまで多くの歴代チャンピオンを輩出してきた本学の自転車競技部。男子スプリントや男子ケイリンなどの種目では、全国から集まった強豪を相手に上位入賞を果たしました。

自転車競技部の部員は、全員が合宿所で生活を続けています。先輩・後輩の関係が厳しく、下級生はみんなの食事も作ります。同じ釜の飯を食べながら、チームワークの大切さや社会のルールについて学んでいるのです。監督は本学の出身で現役のプロ競輪選手。第一線で活躍するプロの指導のもと、「できれば自分もプロの競輪選手をめざしたい」と考えている部員は少なくありません。

そしてそんな自転車競技部の活動を全面的にバックアップしているのがOB会です。同好会として発足してから40年以上の歴史を誇る自転車競技部には、まさに親代わりという立場で面倒を見てくれるOBがたくさんいます。厳しい練習メニューをこなす部員にとって、自転車競技を通じて広がるネットワークは、かけがえのない心の財産になることでしょう。



自転車競技部の合宿所。
全員が同じ屋根の下で暮らしています。



監督の関戸努さん

監督のメッセージ

合宿所では、食事も掃除もすべて自分たちでやらなければなりません。だから社会に出て何でもできるのです。全員が共同で生活しているので“一緒の意識”は強いと思います。大学時代は大人になるための階段。僕自身、大学ですっと合宿所で暮らしていましたが、仲間との信頼関係を大切にしながら、今しかできないことを体験して欲しいですね。OB会の存在は本当にありがたいです。

TGUインフォメーション

青 山学院大学との 総合定期戦で本学が勝利

9月2日(金)～4日(日)までの3日間、青山学院大学との総合定期戦を本学の主管で開催しました。第62回目を迎えた今年度の大会は、震災の影響により日程がずれ込んでしまいましたが、各会場では両校の絆を確かめ合うかのような熱い戦いが繰り広げられました。

総合結果は10勝5敗で本学が勝利を飾り、通算成績はこれで本学の24勝38敗となりました。



東 北学院創立125周年 記念行事を開催

東北学院創立125周年を迎えた今年度は、東北学院のさらなる発展をめざし、さまざまな形で記念事業が行われました。

9月10日(土)には東北学院創立125周年と本学文学部総合人文学科創設を記念し、東京大学大学院教授の姜尚中氏による特別講演会「生き抜く力」を土樋キャンパスで開催。10月14日(金)には「民族資料の展示と民族歌舞の集い」公開シンポジウム「民族歌舞の保存と伝承—報告と表演」を土樋キャンパスで開催しました。また、11月5日(土)には「東北学院フェスティバル」が泉キャンパスで行われ、東北学院の園児や生徒、学生たちが演奏や合唱を披露しました。

なお、記念事業の一つとして、東北学院の創設者である押川方義の図録が出版される予定です。



姜尚中氏特別講演会「生き抜く力」



民族歌舞の保存と伝承—報告と表演

3 キャンパスで大学祭を開催

震災の影響を跳ね飛ばすかのように、元気っぱいの大学祭を今年度も3つのキャンパスで開催しました。



泉キャンパス祭

10月9日(日)～10日(月)の工学部祭のテーマは「挑戦」で、各研究室では最先端の研究が公開されたほか、礼拝堂を会場にしたコンサートも行いました。また、10月9日(日)～10日(月)の泉キャンパス祭と10月14日(金)～16日(日)の六軒丁祭では、虹色に輝く明日への架け橋になれるようにという「虹」を統一テーマとして、さまざまな趣向を凝らしたイベントや展示などを行いました。



六軒丁祭



工学部祭

東 北学院ホームカミングデーを開催

10月15日(土)に「第12回ホームカミングデー」を土樋キャンパスで開催しました。今回から東北学院全ての同窓生が参加対象となり、参加者の間からは盛んに「懐かしい」という言葉が聞かれていました。記念礼拝や記念式典のほか、TBCの元アナウンサー・鈴木俊光氏とフリーアナウンサー・志伯暁子氏によるトークライブも行われました。

また、仙台市青葉区の江陽グランドホテルで開催された「懐かしい出会いの夕べ」には、約550名が参加しました。



震災で被災された受験生を応援

本学では、東日本大震災で被災された受験生を対象に、入学検定料の免除や授業料の減免、入学時特待生制度、緊急給付奨学金(返還不要)など、さまざまな支援措置を行っています。入学金のみで入学が可能になる場合(授業料減免と給付奨学金を最大金額で適用した場合)もあります。

詳しくは本学の入試課(TEL.022-264-6455)までお問い合わせください。

図書館のホームページをご利用ください

本学図書館のホームページなら、図書館からのお知らせをはじめ、開館日・時間や利用方法などをすぐに確認することができます。また、新着資料のチェックや所蔵資料の検索なども手軽に行えます。在学生だけでなく、卒業生や一般の皆さんもお気軽にご利用ください。



<http://www.lib.tohoku-gakuin.ac.jp>

民俗コーナーの企画展を開催

本学博物館では民俗コーナーの企画展として「郷土玩具趣味とは何だったのか? -戦前の趣味家と蒐集趣味-」を3月31日(土)まで開催しています。展示そのものは、本学歴史学科の学生が「博物館実習」の一環として関わりました。また、「東北学院大学の文化財レスキュー活動」をテーマにしたパネル展示も同時開催中です。

詳しい内容は博物館(TEL.022-264-6920)までお問い合わせください。



公開クリスマスを行いました

公開クリスマスとして、12月2日(金)に「第23回 泉キャンパスクリスマス」を泉キャンパス礼拝堂で、また12月16日(金)には「第62回公開東北学院クリスマス」を土樋キャンパスラーハウザー記念東北学院礼拝堂で行いました。

両日ともに地域の多くの皆さんが本学を訪れ、クリスマスモードに包まれたひとときを過ごしました。



T G U カレンダー

1 January

- 13 FRI ▶ 15 SUN 企業研究セミナー
- 14 SAT ▶ 15 SUN 大学入試センター試験

2 February

- 1 WED ▶ 3 FRI 一般入試(前期日程)
- 3 FRI 外国人留学生特別入試

3 March

- 5 MON 社会人特別入試(B日程)・編入学試験(B日程)
- 6 TUE 一般入試(後期日程)
- 26 MON 平成23年度卒業式

4 April

- 4 WED 平成24年度入学式

※入試に関する詳しい日程は、大学のホームページをご覧ください。

■土樋キャンパス

大学院:文学研究科、経済学研究科、経営学研究科
 法学研究科、法務研究科
 学 部:文学部・経済学部・経営学部・法学部(各3・4年)
 夜間主コース
 〒980-8511 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
 TEL.022-264-6411 FAX.022-264-3030

■多賀城キャンパス

大学院:工学研究科
 学 部:工学部
 〒985-8537 宮城県多賀城市中央一丁目13番1号
 TEL.022-368-1116 FAX.022-368-7070

■泉キャンパス

大学院:人間情報学研究科
 学 部:文学部・経済学部・経営学部・法学部(各1・2年)
 教養学部
 〒981-3193 仙台市泉区天神沢二丁目1番1号
 TEL.022-375-1121 FAX.022-375-4040

東北学院中学校・高等学校

〒983-8565 仙台市宮城野区小鶴字高野123番1
 TEL.022-786-1231 FAX.022-786-1460

東北学院榴ヶ岡高等学校

〒981-3105 仙台市泉区天神沢二丁目2番1号
 TEL.022-372-6611 FAX.022-375-6966

東北学院幼稚園

〒985-0862 宮城県多賀城市高崎三丁目7番7号
 TEL.022-368-8600 FAX.022-309-2655

οὐρανός

「ΟΥΡΑΝΟΣ(ウーラノス)」は「天」を意味するギリシャ語です。ヤコブの手紙5章12節は、実践的な教えとして「わたしの兄弟たち、何よりもまず、誓いを立ててはなりません。天や地を指して、あるいは、そのほかどんな誓い方によってもであらうと。裁きを受けないようにするために、あなたがたは「然り」は「然り」とし、「否」は「否」としなさい」と記しています。この個所にも οὐρανός の語が用いられています。

οὐρανός

ウーラノス
 東北学院大学
 広報誌 vol.35

広報誌編集委員会

- | | | |
|------|-----------|--------|
| 委員長 | 総務担当副学長 | 柴田 良孝 |
| 副委員長 | 広報部長 | 宮城 光彦 |
| 編集長 | 文学部教授 | 楠 義彦 |
| 委員 | 宗教部長 | 佐々木 哲夫 |
| | 経済学部教授 | 白鳥 圭志 |
| | 経営学部准教授 | 松村 尚彦 |
| | 法学部教授 | 澤野 和博 |
| | 工学部教授 | 斎藤 修 |
| | 教養学部准教授 | 山崎 冬太 |
| | 総務部長 | 日野 哲 |
| | 総務部次長 | 門脇 邦知 |
| | 広報部広報課長 | 折原 清 |
| | 広報部広報課長補佐 | 菱沼 高一 |
| | 広報部広報課 | 内海 睦夫 |
| | 広報部広報課 | 藁科 明宏 |

東北学院大学広報誌『ΟΥΡΑΝΟΣ(ウーラノス)』に関するご意見・ご質問をお待ちしております。

本誌における個人情報及び掲載記事の取り扱いについて

本誌に掲載されている個人情報は、本人の了解のもとで本誌に限り公開しているものです。よって、第三者がそれらの個人情報を別の目的で利用することや、本誌の無断転載はお断りしております。

発行日は、7月20日・12月20日です。

発行日 2011(平成23)年12月20日
 編集 東北学院大学 広報誌編集委員会
 発行 東北学院大学
 〒980-8511
 仙台市青葉区土樋一丁目3番1号
 TEL.022-264-6423 FAX.022-264-6478
 URL <http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/>
 E-mail uranos@staff.tohoku-gakuin.ac.jp

我ら 卒業生

自分を磨けるのは自分しかない



新入生オリエンテーションリーダーを務めていたとき、蔵王山麓のセミナーハウスで見た夕陽は、今も深く胸に刻まれているそうです。

高校の先生の勧めもあって東北学院大学へ。当時、国鉄(現在のJR)で土木系の仕事をしていた父の姿を見て、「すべての基礎は土木にある」と考えました。土木の分野では女性の視点が必ず活かされる。そしてこれからの社会貢献としてふさわしい——。そんな思いが、土木への道へと駆り立て、私は工学部を選びました。入学後、父は亡くなってしまいましたが、父の仲間と大学のサポートのおかげで、大学を続けることができました。

在学中、新入生オリエンテーションリーダーを3年間務めたことは、かけがえのない財産になりました。それまでは人前に出るのが苦手な性格でしたが、リーダーを務めてからは苦手意識がなくなりました。当時の工学部には女性用のトイレが2カ所しかなく、休憩時間に苦勞

したことも今となってはいい思い出です。

卒業後は恩師の紹介で現在の会社に入りました。その頃はまだ女性の社会への参画が立ち遅れていましたが、自分の中には「負けてはいけない」という強い気持ちがありました。それこそが東北学院大学で培った精神だと思えます。仕事を続けるうえで、好奇心と続ける根性が大切です。

大学では人を愛する気持ちを学んでください。そのためには自分を磨くことです。そして「自分を磨けるのは自分しかない」ということを肝に銘じて欲しいと思います。東北学院大学は先生との距離が近いです。自ら学びとろうとする姿勢を大切に、人間形成をめざしてください。



愛知県尾張東部浄水場
 296,000m²/日

中日本建設コンサルタント株式会社 環境技術本部 部長

なかにし とし み
中西 利美さん

1971(昭和46)年工学部土木工学科(現:環境建設工学科)卒業。中日本建設コンサルタント(株)では、環境技術本部の上水道担当部長として、社員の技術指導など後進の育成にあたる。技術士(上下水道部門)、(社)日本技術士会CPD認定会員。学校法人東北学院評議員、東北学院同窓会東海支部の幹事も務める。宮城県出身。

編集後記

震災で始まった今年度もクリスマスの時期を迎えました。街にはイルミネーションが彩りを添えています。ところでツリーのイルミネーションは、1536年に宗教改革者のマルティン・ルターがモミの木の間にきらめく星を見て感銘を受け、自宅でろうそくの灯りで再現しようとしたのが始まりと言われています。数百年の年月に思いをはせつつ、つらかった今年を振り返り、他者へのいたわりと感謝の気持ちを新たに、そんな日々を過ごしていきたいと思えます。

